

「華語萃編」から見た同文書院の中国語教学

愛知大学東亜同文書院大学記念センター/
オープン・リサーチ・センター研究員

今泉潤太郎

司会 今日では東亜同文書院大学記念センターの講演会と致しまして、“日本における中国語教育の源流、『華語萃編』から見た同文書院の中国語教学”という表題で、今泉潤太郎先生からお話したいと思います。先生のご経歴或いはご業績については後ほど説明させていただきますが、ただいま進行しております本センターのプログラム、プロジェクトにつきましてはセンター長の藤田先生から先ずお話をお願い致したいと思います。

藤田 皆さん こんにちは。本日はこの講演会にご参加いただいて大変ありがとうございます。只今、ご紹介いただきました東亜同文書院記念センター長の藤田と申します。お聞き及びかと思いますが今年度、即ち昨年の5月から東亜同文書院記念センターが文部省のオープンリサーチセンタープロジェクト、これに選定されました。そのためにいろいろなプロジェクトを立ち上げ、これから5年間やっていきます。去年は第一次として、一つは東亜同文書院大学の総合的な研究をする、それからもう一つは愛知大学が東亜同文書院大学とどういう関わりを持って展開してきたのかという面での愛知大学の大学史をさらに進めていこう、併せてセンターの現状を充実させていこうというものであります。今は改修工事中で来年度には中身を、大学史の方を皆さんに新しく公開できると思っております。こういうわけで、こういった企

画が本年度を含めて5年間、国際シンポジウムをはじめ実施されます。なお、昨年は横浜で全国図書館展が開催され、愛知大学としては初めて展示会を関東地区で本格的に行い、大変好評を受けました。この場を借りていろいろセンターのコミーシャルさせていただきました。今後もよろしくご支援のほどお願いいたします。

司会 講演に先立ちまして、今泉先生のご経歴ならびにご業績を簡単に紹介させていただきます。先生は1932年（昭和7年）豊橋でお生まれになられ、51年時習館高校をご卒業になり、すぐに愛知大学文学部に入学されました。4年間の学業を終えてご卒業になり、翌々年、この愛大の副手になられ、58年には助手、59年に講師、64年に助教授、76年教授に昇格されました。その後、87年非常に有名になりました中日大辞典編纂所所長になられ、95年に大学院中国研究科科长、98年に大学院院長を、そして2000年から2002年にかけて、現代中国学部学部長を歴任されたわけであります。そして2003年（平成15年）愛大を定年退職されまして名誉教授になられました。しかし、その後も中日大辞典編集主幹として、今なお勤めておられます。業績につきましては多方面に亘りますが、ざっと見たところ5つぐらいの分野がございます。

一つは中国語の語学的な研究の諸論文があり、

もう一つは中国語教育に関する諸論文があります。その中には本日の講演の表題とほぼ一致しております愛大国際問題研究所紀要103号に書かれました1995年ですが、「東亜同文書院における中国語教学『華語萃編』を中心に」という論文がございます。今日の話はたぶんそれをさらに発展させた内容でお話しになるのではないかと思います。3番目は孫文・山田良政・純三郎兄弟関係の資料紹介について書かれたものです。4番目にはこれは私も一緒にやらせていただいたのですが愛知大学50年史の編纂執筆がございます。そして5番目これが非常に重要でありますが愛知大学が編集いたしました『中日大辞典』、わが国のみならず世界的にも評価されている『中日大辞典』の編纂に一貫して携わってこられたことでございます。1968年には第一版（初版）が出ますが、このときは鈴木擇郎先生の下で編集委員を務められました。その後、1986年の増訂版、翌年の増訂二版につきましては編集委員長を務められました。こう言った偉大な功績がございましたので、2004年今から3年ほど前ですか、東亜同文書院記念基金会から記念賞を授与されておられるのであります。以上、業績について簡単にご報告いたしました。それでは今泉先生、よろしく願いいたします。

今泉 今泉でございます。今、ご紹介いただきましたが、過分なお言葉、賛辞とも取れる内容でございます。内心忸怩たるものがあります。さて本日の演題ですが、以前発表したものと題目はほぼ同じですが、視点を変え、内容的にはそれを膨らませたようなものであります。中国語について専門家もおられますし、何年間も学習されている方もおられますし、或いはほとんどご存知ないという方もおられますやに思いますので、どこに絞ってお話してよいのかわからなくていろいろ迷っています。それで配布しましたプリントを見ながら楽に聴いていただければと思います。ただ、プ

リントにした資料も選択が間違っていた事に後から気がついたりして、適切なものとも思えませんので、あっちへ行ったり、こっちへ行ったりということがあるかと思います。ご容赦をお願いいたします。

東亜同文書院そのものが数十年前、なくなって過去のことになったわけですが、卒業された方は多数にのぼり、当時在学中だった方も勿論おります。本日ご参加の方の中にもおられますので、そういう方々の貴重なお話も聴かせていただきたいと思います。私が同文書院に関してお話する時は、ほとんど書院関係の方々の記録、お話とその他に自分が調べたものをご紹介するということもあります。私自身の体験はこのプリントで言いますと、戦後の華語萃編、愛知大学で使われた華語萃編、学生のときはそれを習って、教員のときはそれを教えたということであり、それを継承した愛知大学の『中文会話教科書』、これらについては自分の言葉でお話できると思います。

それでは、プリントで大きく三つに分けております最初の「東亜同文書院について」というところから入ります。

レジュメにキーワードを載せておきましたので、まずこれについて説明します。同文書院ができるのは20世紀の初め、1901年であります。その少し前、19世紀末に「日清貿易研究所」、日本と清国との通商交易のための実地訓練所、ビジネススクールができます。これを創ったのは「荒尾精」という方です。この日清貿易研究所が同文書院のいわば前身といえます。これと関係が深い「東亜同文会」という民間団体がございました。この会長が「近衛篤麿」という方であって、「東亜同文書院」はこの東亜同文会が中国の上海で経営する学校であります。東亜同文書院院長を創設以来20年に亘って務められた方が「根津一」という方であり、荒尾精の親友でもあります。東亜同文会はさきの敗戦により解散の憂き目に遭います。近衛篤麿の長男でありました近衛文麿会長、

東亜同文書院大学記念センター講演会

「華語萃編」から見た同文書院の中国語教学

講 師： 今泉 潤太郎（愛知大学名誉教授）

日時： 2007 年1月 26 日(金) 13:30～15:30

場所： 愛知大学豊橋校舎 研究館1階 第1・2会議室

1. 東亜同文書院について

日清貿易研究所 荒尾精、東亜同文会 近衛篤磨、東亜同文書院 根津一
霞山(カザン)会 遼友(コユウ)会
南京同文書院—(上海)東亜同文書院 高昌廟桂墅里(クイシュリ)校舎—(長崎)—
赫司克而路(ハスケルロ)仮校舎—徐家匯(ジョカワイ)虹橋路(ホンチャオロ)校舎—
(長崎)—徐家匯海格路(ハイコーロ)(交通大学)臨時校舎 (日本)富山県呉羽分校

2. 「華語萃編」について

清国語 支那語 華語 漢語 官話 方言 時文 尺牘(せきとく) 漢文
「華語跬歩(カゴキホ)」 御幡雅文
「華語萃編(スイヘン) 初集 二集 三集 四集」
青木喬 真島次郎 松永千秋 清水重三 鈴木擇郎 熊野正平 野崎駿平 坂本一郎
ウエード式ローマ字 注音字母(ボボモフォ) 漢語拼音字母(ピンイン)
声母と韻母 声調(四声) 声調記号 圈点 ○ ●
一声(上平) 二声(下平) 三声(上声) 四声(去声) 一 / 〵 〵
審音 重念 輕声 簡化字(簡体字) 繁体字 散語 問答
「官話指南」「談論新編」
戦後の「華語萃編」
愛知大学油印本「華語萃編 初集 二集」と「中文会話教科書」

3. 学生調査大旅行と「旅行用語」

「支那經濟全書」
「調査大旅行報告書」「調査旅行日誌」「各期別旅行誌」
「支那省別全誌」「新修支那省別全誌」
「旅行用語」



戦争中に総理大臣を務めた方ですが責任をとり自殺され同文会もなくなるわけです。その後を継承する団体が「霞山会」であります。霞山というのは近衛篤磨公爵の号からとったもので、現在、活動をしています。「滬友会」の滬というのは上海の別称でありまして、上海の同文書院とともに学んだ同窓ということで同文書院卒業生の会を滬友会と称しています。5,000人弱の会員がだんだん少なくなりまして、同窓生が減る一方ですので、数年前に全国的な規模での組織は解散されました。各地の滬友会や同期生会というのはございますが、いわゆる同窓会活動としては、特別会員として愛知大学同窓会の中に入って、愛知大学同窓と共に活動しています。

同文書院は当初、南京にあり南京同文書院と称しました。義和団事件が起こり、危ないということで、翌年に上海に移り、名前も東亜同文書院に改め、上海で敗戦の年まで教育をしていたということです。当時は清朝であります、最初は「高昌廟桂墅里（クイシュリ）」というところなんです。当初は監獄より劣るというようなことを3期生の方が書いていますから、学校というよりも民間の塾のようなものであります。ここも国内の戦乱に遭い、校舎が焼けてしまっって一時的に避難をし、仮校舎を「赫司克而路（ハスケルロ）」というところに定め学校を続けます。そして1、2年して次の「徐家匯（ジョカワイ）虹橋路（ホンチャオロ）」というところに初めての自前の校舎、ここでの時期が同文書院の最も充実した時期、虹橋路校舎の時期というような言い方をします。先ほどご挨拶いただきました、センター長の藤田先生がされた研究、中国大調査旅行によれば、これの最も円熟した時期に当たります。その後、第二次上海事変の翌年ですが、また戦乱に遭い校舎が焼失、長崎に避難する、その1年後に虹橋路校舎の隣の「徐家匯海格路（ハイコーロ）」にあった「交通大学」、当時、日中戦争のために奥地に避難し学校が空き家になり、難民が占拠していたのですが、

ここを借りて、臨時校舎として敗戦の年まで学校を続けるわけです。東亜同文会は、ここは中国の大学であり、それを我々が長く使うということはよろしくないといって虹橋路校舎再建支援の請願書を日本政府に出しておりました。また、敗戦の頃には上海に渡る船便がない、全部アメリカの潜水艦に撃沈されてしまいますので、昭和20年入学の、最後の同文書院大学入学生は上海に渡れなかったのも、やむなく富山県呉羽にありました工場を借用し開設した「呉羽分校」で教育を受けることになりました。

いま述べたような歴史を持つ同文書院でいったい中国語がどういう位置を占めていたか、これは改めて言うまでもないわけです。当時は日清貿易であります、日本と中国との貿易実務を担当する有為な人材の育成ということがこの学校の設置目的でありました。中国語が最も重視されていたということは当然のことです。1年から3年、または4年まで一貫して中国語を教え、身につけさせる、体得させるということが至上目的である。というよりも、実は卒業の年次に行われる調査大旅行のための中国語、実際に調査旅行を可能ならしめる中国語の習得ということに目標を設定し、そのために、例えば時間割の組み方も優先的に行われましたし、授業時間数も十分取れるということです。そして、その中国語教科書が『華語萃編』であります。同文書院で唯一の中国語教科書いわば定番の教科書で、1年から3年、4年まで初集、二集、三集、四集と段階的に上げていって、最後に『旅行用語』で仕上げるというような形態、或いは日本人教員と中国人教員が常にペアで講義をするという形態、ずいぶん贅沢と言えは贅沢です。それから教科書が話し言葉の問答体で構成されている。それからこの教科書を使う教員でありますけれど、これは全員に同文書院の中国語についての共通認識があるということ、一つの事例ですが同文書院の中国語の教員、日本人教員は全員が同文書院の卒業生である、た

だ一人の他校出身者を除く全員が同文書院の“たたき上げ”といいいましょか、華語萃編を作り、また徹底的に華語萃編で訓練されて中国語を身につけて、実際に調査旅行に参加した者であったということでもあります。学生は華語萃編を徹底的に復習します。教室で習いますと、それを復習するシステムがありました。2年生が1年生を指導するという形で、自発性を伴いますが、むしろ制度として学校教育の中に組み入れられていた。これはニエンシュー、「念書」と言いまして、これを行うことが日課で学園生活の一部となっております。

同文書院が上海にあったということ、周りが全部中国人街であったということも重要なことであります。租界、のち国際共同租界といって、中国政府の主権の及ばない地域に日本人を含めた外国人は居住するのが常であります。同文書院は徐家匯（ジョカワイ）海格路（ハイコーロ）、虹橋路（ホンチャオロ）もそうですが、租界外にありました。周辺が中国人に取り囲まれている、同文書院の日本人数百名がその中に孤立しているという、大げさに言えば、そういう環境であります。全教職員、学生が同じキャンパスで居住します。学生は全寮制でありまして、寮長は上級生なのですが、各学年次の者が同室、同級生同士を同じ部屋に入れない、出身地とか或いは部活動が同じとか、親しい者同士が入学から卒業まで生活を共にするわけですから、友情が非常に濃くてまた連帯精神、団結力も強いわけです。そういうような環境で念書をさせるわけです。念書については同文書院卒業生がいろいろな所で書いておりますし、言っておりますところのカラス教育です。これは早朝或いは夕食後、院子（ユアンツ）つまりキャンパスの中庭で華語萃編を1年生が2年生から指導を受けて復習するということでもあります。朝早くからカーカーカーという「四声」、つまり中国語の発音練習がそこそこで賑やかにやられる。このカラス教育こそ書院の中国語教育の名に恥じないと非

常に高く評価している者もおりますし、逆にこれが苦痛でいやになり夏休みに日本に帰ったら同文書院に戻らず中退しようと思う者もおる、そのくらい徹底的になされていたということでもあります。

もう一つ上海にあったことの意味ですが、上海は中国の中でも特殊な位置、特に重要な位置を占めております。19、20世紀にかけて、また現在もそうですが、非常に経済的に発展した大都市で、軽工業を中心とした各種産業、商業、金融、流通、通信、情報、印刷、出版、文化、教育などの中心であり、また政治的にも重要な場所で、なによりも外国・欧米と最も近い距離にあるわけです。同文書院の当時は、バンドー帯の高層ビル群の近代的な都市の顔と同時に、郊外に出れば古い清朝時代の名残を留めている田舎、新旧の際立つその意味で非常に特殊な地域であり、国際的なハイカラな場所です。これが書院生にとっては非常にいい刺激になった。こういった環境の中で中国語学習が行われていたことは当然といえば当然ですが、改めて注意しておく必要があります。

では『華語萃編』についてお話いたします。レジュメをご覧ください。

「清国語」というのは、中華民国の前、大清国、日清貿易研究所の清（シン）です。次の「支那語」ですが、学術用語の支那という言葉自体が偏見を持つわけではないのですが、現在では使用されません。しかし、戦前、支那語というのはごく普通の言葉として通用しております。これをやや硬く言ったのが「華語」であります。華語萃編の萃というのは集めるという意味で、いい中国語を集めた教科書というような題名になっています。

「漢語」と言うのは、中国で言いますが、日本でも硬く言うとき、学術用語としては「漢語」を使っております。「官話」は民に対する官で、役人、役所の言葉、マンダリンとも言いますが、当時の共通語、標準語です。それに対して「方言」というのが各地域の民間の言葉です。訛りというには



あまりにも大きすぎる差がありますので「方言」、それも使用人口の多い所では何千万、何百万という人が使う言葉であります。三河弁という感じで上海方言を捉えるのはどうかと思います。

次の「時文」はその当時の文章という意味であります。特に清朝の末期から民国の初め、清末民初の文章という意味であります。広い意味での中国語ではありますが、専ら読む、書くための中国語です。

次の「尺讀」(せきとく)も同じであります。文語調の書簡文、役所が出す公用文、例えば省が県に出す、或いは中央政府から各省へ出す、こういう中国語の科目もあります。「漢文」はふつう日本で使う漢文で、中国の古典文ということになります。

「華語跬歩」(かごきほ)は華語萃編以前の教科書であります。「御幡雅文」が作りました。御幡雅文は日清貿易研究所の中国語の教授でありました。そして創設期の同文書院でも中国語の教授として教えます。ただし身分はもともと上海の三井洋行の社員であり、いわばアルバイトとして同文書院で教鞭をとっていた。華語萃編の前の時期の同文書院中国語教科書といたらいいでしょうか、華語跬歩は片仮名を発音符号としていた時期の日本の中国語教科書であります。同文書院の初期にはこれを使って教えていたようであります。

さて、御幡雅文の華語跬歩で教えられた「真島次郎」(第2期)、或いは第4期の「松永千秋」、更に「清水董三」(第12期)らは卒業後、母校の中国語教員となります。「青木喬」は日清貿易研究所で御幡雅文から教わりますが、同文書院の最初の中国語教員、特に尺讀の大家で教科書もいくつか作っております。この人達により華語萃編は作られます。清水董三、さらに15期の「鈴木擇郎」、17期の「熊野正平」、18期の「野崎俊平」、20期の「坂本一郎」などは華語萃編を修訂するわけです。

大正5年に華語萃編初集ができますが、この華

語萃編を最初に使うのが鈴木擇郎先生の15期生からであります。鈴木先生が1年生のときに初めて華語萃編ができて、最初に使った学年です。ただ二集、三集、四集は出されておられませんので、2年生では「官話指南」を、3年になって「談論新編」を、いずれも同文書院とは関係のない別の教科書を使った。二集は大正13年に2年生22期生から使用、三集、四集は昭和8年に出版されます。セットで1年から4年まで使ったというのは33期以降からになります。

当時使った発音記号が次の「ウェード式ローマ字」と「注音字母」です。ウェード式ローマ字は清末から民国7年(大正7年)に注音字母が制定されるまで、その後もかなり後になるまで使いました。これはa, b, c順であります。注音字母というのはポ、ポ、モ、フォといった独特の形をした字母を使います。ここにおられる年配の人はこれで習ったと思います。

次の「漢語拼音字母」は拼音、ピンインと読みますが、これが中華人民共和国になってからの正式な発音記号であります。愛知大学でも昭和40年代以降はこのピンインを使うことになります。

「声母と韻母」ということですが、子音と母音ということです。中国語には特有の声調というのがありまして、「四声」ともいいますが、これを表す記号が二つあります。一つは圈点と言って。と・を漢字の四隅につけます。○は無気音、・は有気音を表します。もう一つのやり方が線を用いるもので、一、／、＼、\の記号をつけます。「四声」というのは一声、二声、三声、四声(上平、下平、上声、去声)、中国語(標準語)の四つのトーンであります。発音記号とともにこの四声記号を付してその字の発音を表示するわけです。「審音」というのは発音を審訂、これが正しい、これを残して他の発音はやめましよう、決めたものです。

次の「重念」と「轻声」、特に重念は華語萃編で中国語をやった人、同文書院や愛知大学では強

調されました。重念は、他ではあまり言いませんでした。現在では、ほとんどもうこの言葉、考え方自体がない、重念ということは専門家でも言いません。「軽声」は今でも用います。具体例は後ほど課文を見て説明します。

次の「簡化字」(簡体字)と「繁体字」。例えば台湾の「台」が簡化字で、「臺」が繁体字。中国では繁体字はふつう使用しません。台湾では繁体字を使用します。もちろん同文書院の時代はすべて繁体字で簡体字はありません。愛知大学では繁体字と簡体字を混在させた時期の華語萃編がありますので、その頃、中国語を学んだ方達は両方とも覚えさせられましたので、今となっては都合がいいこともあるでしょう。現在、日本の学生は、いや中国の学生も繁体字を習いません。

次の「散語」と「問答」というのは、これも後で具体例をみますが、以前の中国語教科書ではよくあるスタイルでした。「問答」すなわち会話体のようにクエッション、アンサーではなくて、ばらばらに、前後の文と無関係な短文を並べたものを散語と言っています。「戦後の華語萃編」は、「愛知大学油印本華語萃編」のことであり、華語萃編は同文書院とともになくなったわけではありません。愛大でも長年使用しましたので、これについては後にお話します。

それでは、華語萃編についてお話します。同文書院の教科書、華語萃編は、初集、二集、三集、四集とありまして、大正5年にまず初集が出ます。以来一貫して使用されてきたものであります。教科書の構成は最初に発音、プリント2'に見られるように無味乾燥と言いましょいか、同音の漢字をずらりと並べております。次に散語、問答、それぞれ題目のついた「課文」、巻末に付録の名詞集となっています。今からお話しするのが、大正5年にできました華語萃編の初版本であります。手に取って見て、たいしたことはないと思われるかもしれませんが、これ以前の教科書は、例えば華語跬歩にしても最初は和綴じ本です。江戸時代、

明治の初年、日本で活版印刷が普及する以前では普通の和綴じ本の教科書です。大正5年上海でこの華語萃編を使って中国語を学ぶ書院生は非常に格好よく感じたものと思います。これは真島・松永先生らが中心になって作られたものであります。中国文はもちろん中国人の教授が書き下ろし、それを真島・松永ら日本人の教授がともに検討しながら決めるわけです。このレジュメでは中国人教授の氏名は省略いたしております。その後、華語萃編は何回も繰り返し改訂をおこないます。その時代に合わせて、内容を微調整もしくは大きくかえる、これはある意味では当然でして、そうしてこそ、はじめて華語萃編としての一体性が保たれる。同文書院定番の中国語教科書という名に恥じないものになる訳であります。二集、三集、四集が全て揃いますのは、昭和に入ってからということとは先ほど申し上げました。

発音について具体的に見ていきたいと思えます。プリントの1であります。「華語発音表」というのがありますが、上が比較的古い時期の華語萃編のもので、下が新しい時期、というよりも戦後愛知大学で作った華語萃編のものであります。変化が著しいので、対比しました。まず、縦の欄は聲、子音であり、横の欄は韻、母音です。ウェード式ローマ字の発音方式と注音字母方式、プリント1の下に「華語声韻組織表」、同じものですが、この図を見ていただきますと、「b」が上の表では「p」、「p」が「p'」になっています。これは中華人民共和国になってからできました拼音字母、ピンインであります。同文書院の時期にはピンインは当然ありません。次にプリント2'と2"をご説明します。2'左の「声韻字母表」は「b、p、m、f」とその下にあるのが注音字母、ポ、ポ、モ、フォで、対比されております。これが同文書院の時代の「華語萃編」であります。

プリント2"の右のところ、「發音」を見ますと、プリント1で見ました(a)啊から、(ai)哀、(an)安とあり、学生はこの字を見て発音するわけです。

これに比べてプリントの2"で真ん中に、猫 (mao)、鶏 (ji) …、黒猫 (heimao) があります。この二つを対比するとまず哀は音声を表す (ai) で、哀しいという意味を持つ言葉としての哀ではありません。しかし猫 (mao)、黒猫 (hei mao) の方は、ねこ、くろねこという言葉の発音を練習するとい

えます。つまり意味・内容をともなった音声として練習できるわけです。更に二字語の香煙 (xiang yan)、飛機 (fei ji)、あるいは四字熟語の三民主義 (sanmin zhuyi)、花紅柳緑 (hua hong liulü)、こういうのは一声・二声・三声・四声という四つの声調が一つの熟語に入っている言葉を選んであ

[illegible][illegible]

る、大きな声でいっしょに発音練習すると気持ち
がいい、そういった効果があります。これは愛知
大学油印の「華語萃編」であります。同文書院の
華語萃編は、確認できたもので昭和18年版が最
新版でありますから、19年版・20年版にこの形
があったかどうか確認できておりません。

どうも同文書院は、発音教育について、現在の中国語発音教育のやり方から見れば、無きに等しい。つまり、学生の関心を高めるためにはこうしたらおもしろい、あしたらしいとか殆んど考えなかった。教科書もそのように編集されていないのです。発音を身体で覚えるのが当たり前、理屈

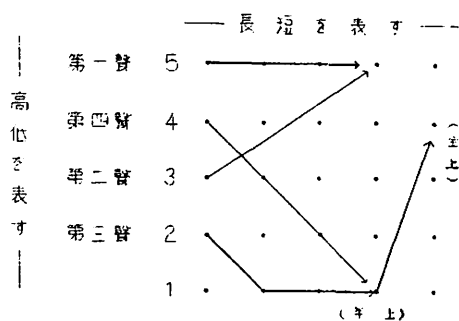
shēng yùn zì mǔ biǎo
声 韵 字 母 表

b	p	m	f	d	t	n	l
卜	坡	文	坡	刀	得	立	特
g	k	h	佛	q	欠	歌	丁
《	哥	牙	科	q	基	欠	歌
zh	ch	sh	r	p	资	才	雄
出	出	行	重	z	资	才	雄
		午	南				
		日	日				

二 韵 母 表

a Y O N e	啊 喔 呜	ā Y O N e	呀	u Y O N e	乌 蛙 窝	ü ü	迂
ai f ei	哀 欸	ie ie	耶	ue X f ei X	歪 威	ue ü ie	约
ao z uu	熬 欧	iao z iu	腰 忧				
an g en	安 恩	ian g ien	烟 因	uan X g en X	弯 温	uan ü en	冤 冤
ang w	昂	iang w	央	uang X w	汪		
eng X	平的韵母	ing X	英	ueng X X	翁		
ong X	雍的韵母	iong X	雍				

四 聲 聲 調 圖 表



プリント2'

māo	jī	gē	yā				
猫	鸡	鸽	鸭				
	hēi māo	xiǎo jī	gē dàn	jiā yā			
	黑猫	小鸡	鸽蛋	家鸭			
xiāng yān	fēi jī	bīng xiāng	gōng sī	zhuān jiā			
香烟	飞机	冰箱	公司	专家			
tí gāo chǎn liàng	zhēng qǔ xìng fú	bǎi wàn gōng rén					
提高产量	争取幸福	百万工农					
shān míng suǒ xiù	huā hóng liǔ lǜ	fēng tiáo yǔ shùn					
山明水秀	花红柳绿	风调雨顺					
guā fēng	fēi jī	tōng zhī	gōng sī	zhuān jiā			
刮风	飞机	通知	公司	专家			
tí gāo chǎn liàng	zhēng qǔ xìng fú	bǎi wàn gōng rén					
提高产量	争取幸福	百万工农					
liàn tiě chéng gāng	rè huǒ cháo tiān	tóng gān gòng kǔ					
炼铁成钢	热火朝天	同甘共苦					

三分香

民	煙	貓	尤	刁	另	丫	
主							音 發
義	飛	黑	鷄				
	機	貓	(ang)	(an)	(ai)	(a)	
花	廳	小	鵝				聲一第 (平上)
紅	風	鷄	鴨				聲二第 (平下)
柳		鵝					
綠	衣	蛋	○	俺	矮	啊	聲三第 (聲上)
	袋	貓					
		家	盎	按	愛	阿	聲四第 (聲去)
		鴨	毛				
山	公						
明	司	卯					
水							
秀	家	貌					
	兄						

プリント2"



はいらぬと言わんばかりで、誤解されかねない。これに耐えられなければやめる外ない。そういう入学生はいない。同文書院に入学する者は、中国語は最終的には調査大旅行のため、卒業して中国実務に携わるため、すべて中国と関連した分野で活用するために学ぶのである。動機付けがない者は入ってこない。当たり前といえば、当たり前であります。

それに比べて愛大版は、丁寧に編集してある。逆に言うと、勉学の動機付けが薄い者にもやさしいとも言えます。同じプリントの左にいきますと、横書きになります。これも愛大版です。この当時、昭和30年代後半になりますと、中国では、すでに中華人民共和国が1949年、愛知大学ができて3年後、新制の大学となった年に成立しました。中国語は急速に変化します。横書きとなりました。これを反映して、愛大版の横組みの華語萃編がでます。すでに、三民主義はありません。あるいは、家兄というような言葉も載っていません。その代りが冰箱（冷蔵庫）、专家（専門家）、百万工农（巨大な労働者・農民）といった簡化字の新語であります。こういうような単語を使って発音練習をする場合、単純な発音練習であっても、学生は、百万工农とはいったい何か、意味もわからないと満足しないし、教える方もやりにくくなる。発音訓練だけに留まらなくなる。こういった教授上の問題を含んでおります。

いずれにしても同文書院はこの発音の習得をごく短時間に、大体、夏休み前までに集中的に、徹底的にやって、夏休み明けてから、プリントの3になりますが、こういった文章にはいります。プリント3の右のところは、初集初版の文例であります。一課は聞一知十（一を聞いて十を知る）とありますが、これが終わりました、第四課、散語問答とあります。先ほど言ったように、散語とはばらばらの短文というものです。テーマとしては例えば天候であります、還下雨嗎？（まだ雨降っていますか）、還下着哪。（まだ降っています）。

この文で“雨”と“下”のところの横棒は、先ほど述べた重念を示すものであります。ここを強く読みなさい、という印であります。これが大正14年の改訂版になりますと、散語問答ではなく、基本散語という名称に変わります、課文も好（いい）、不好（悪い）、好了（よくなった）、沒有好（よくなってはいない）になります。つまり、否定、完了、その否定というような文法的な要素が加味されています。問題がある例文は次の改訂版で訂正されていきます。初集は数回の大改訂をいたします。

愛知大学独自の中国語教科書が『中文会話教科書』で、華語萃編を継ぐものですので、参考までに挙げておきました。プリント3の左下がそうです。基礎篇が基本散語に当たりますが、这个好。那个不好。（これはよい、（が）あれはよくない）这个好不好？ 这个很好。（これはよいか？ これはよい）というふうになっております。文型別に文法的な説明をするために配慮がされているわけです。下の文も同類であります。

次に課文について見ます。プリントの4です。先に見たように散語と異なり、課文になりますと、特定の題目に沿った会話で構成され、華語萃編の持つ特徴が遺憾なく発揮されていると思います。各課の課文はすべて四字の熟語による標題がついております。教科書の前の方に出る初會周旋（初対面でのやりとり）を選んで説明します。この標題は硬い表現ですが、本文そのものは、すぐに応用できるものばかりです。

5種の課文があります。縦書きのものと横書きの上のものはいずれも華語萃編で、下の初次会面（初対面）は中文会話教科書です。右から初版、大正14年改訂版、昭和24年（？）油印版（縦書き）で、横書きのものは昭和38年（？）愛大油印版です。まず発音面ですが、2種類の四声記号の違いがわかると思います。そして、漢字の横の縦棒、油印版（横書き）の場合は漢字の下に横棒が重念を示す記号、初版にはなく改訂版から入ります。

第一課 聞一知十

十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十

第四課 敬語問答 其三

(五) 退下。雨聲。
(六) 有風。沒有。
(七) 天晴了。沒有。

第一課 基本散語 其

好	壞	不，好	不，壞
了	了	沒，有	沒，有

第十三課 基本散語 共十三

(二)天晴了麼
(三)月亮出來了麼
(四)雲下雨麼

晴了、太陽都晃出來了
出來了、可是、有雲、彩
雲下、落雪

第一課

壞、	好~
。	。
不、	不、
壞、	好~
。	。
壞、	好、
不、	不、
壞、	好
?	?

第十四課

一) 天晴了嗎？
二) 月亮上來了嗎？
三) 雲下雨嗎？

晴了，太陽都出來了。
上來了，可是有雲彩。
還下着哪。

dì yī kè
第 一 課

这 个 好。
 这 个 好 不 好？

那 个 不 好。
 这 个 很 好。

第十課 外头还下雨嗎？

外 头 还 下 雨 吗 ? 还 下 着 呢 , 可 是 下 得
不 大 。
昨 天 夜 里 我 们 街 坊 那 您 受 惊 了 。
着 火 了 。

第十八課 chū 、 zhōu xuán
初 会 周 旋

您姓姓啊？ 敝姓林，您呢？
我姓山本，您在哪儿恭喜？ 存在上海
市政府当秘书。您呢？ 我是戴森
井公司在这一点责任。 贵公司
是大事业。 岂敢，您多关照；林先生
住住处是哪儿省？ 我原籍是北京

第一課 chū 初、次、會、面

shū \ - \ \ / .
甲 舒先生在家嗎？ 乙 在，請進！ 甲 您就是舒

生先吧？ \ \ xìng hēng tián 、 - fāng
乙 是，你貴姓？ 甲 姓張橫田，在東方

\ / , zhù、 / - shòu jiè · shào。 / 。 。 / 。 / 。
大學作助教，田中教授介紹我來見您。這是田中教

授的介紹信。 乙 啊，請坐請坐！田中先生好嗎？

第十課 初會周旋

乙慈貴姓啊 乙賤姓孫承領教您納 乙賤姓黃
謂敬台甫 乙先謂敬 豈敢豈礙草字麼九
乙高雅高雅兄弟小字露入 乙久仰久仰
此彼此 乙您在那兒恭喜 乙在上海三井洋行
乙慈貴姓啊 乙賤姓林慈喜 乙姓黃謂敬台甫
乙兄弟小字守仁保守的守仁磯的仁先生雅藏 乙久
草字仲國厚立人兒一個中國的中田國的國 乙久
仰久仰 乙彼此彼此 乙您在那兒恭喜 乙在上
海市政府當秘書您嗎 乙我是東亞同文書院大學
的學生您府上在那兒住 乙食下在虹口小菜場的

第十九課 初會周旋

「露貴姓啊？」
「甫？」
「兄弟，小字守仁；保守的守，仁義的仁。」
「先生雅鑒！」
「草字仲圖；正直人兒一個，中國的中。」
「田園的圖！」
「久仰久仰！」
「彼此彼此！」
「您在那兒恭禧？」
「在上海市政府當秘書；您哪？」
「我是，在華中銀行當點兒責任，您府上在那兒住？」

愛大油印版（縦書き）は欧文並みの各種記号が入ります。

課文の内容についてみますと、初版の豈敢、高雅などは改訂版以降なくなります。また三井洋行が三井公司になり、改訂版の東亜同文書院大学が愛大油印本（縦書き）では華中銀行となり、更に油印本（横書き）では、草字や雅篆などをとっております。表現、内容とも新しい時代相を反映したものとなったわけです。プリント4の左下のは愛大中文会話教科書のものですが、華語萃編とは全く違うことがわかると思います。

次に、華語萃編の二集、三集、四集についてお話しします。プリント5をご覧ください。初集に引き続き二集が2年次、三集が3年次、四集が4年次用のものです。見ればすぐわかりますが、漢字ばかりで、句読点などがつけてない。特に四集の課文は漢文で言うところの白文でありまして、どこで息を継ぐのか、文が終わったのか、すべて、だけです。区別がつかないわけです。学生は先生の読む後について発音するわけですが、先生の読むのを聞きながら教科書に句読点をつけ、重念の印を打つ、緊張を強いられるわけでありました。4年間の学習でここまでレベルを上げるのは大変だと思えます。さて、二集の目標はやや複雑な交際応酬、言いつけ、風俗習慣を習得することにあ

り、三集では通商用語、高尚な訪問応酬、外交辞令の習得、四集になりますと、文化、教育、農工商、市俗の高級な会話、公の席の挨拶、講演などの習得を目指すものとなっております。このような段階を経て中国語の会話能力を高めてきたのは、最終目的である調査旅行のためでありました。そこで最後のプリント6をご覧ください。

この調査旅行は同文書院最大のイベントであり、書院生にとっての夢でもありました。創立以降、年代により実態は一様ではありません。各期の調査旅行を可能ならしめる中国国内の状況及び日中関係の影響をまともにかぶったからであります。藤田先生の「中国大調査旅行の研究」を引用して説明いたしますと、プリント6の下の方言地図であります。これは12期生が実施した調査旅行コースの記録から示される言語の分布に、私が漢語方言図をかぶせて作ったものです。ここでは、専門的な方言調査の訓練を受けてはいないであろう書院生の調査結果と結果的にずれていないことだけ指摘しておきます。

プリントの上の「北京官話旅行用語」の著者は清水董三、大正14年初版、昭和8年に改訂版を出しました。小型のポケット版です。携帯を考えたことでしょうか。内容は周旋応待、送迎、地方官衙、駐在軍警、地方団体、車船店脚などに亘

華語萃編 二集

第一課 故鄉訪友

辛苦這兒是陶宅麼？是的，你們老爺在家麼？是在家麼？這兒姓陶，我姓錢，纔解日本來要拜會您，煩您給回一聲兒，是麼？請候一候兒，好，森先生請您到這兒坐。

第七課 改革家庭

近幾年來，在貴國因爲新思想是一天比一天的發展，所以一般人的心理對於家庭改革的這件事，我聽說很有主張。這個說兒的就拿各種的雜誌和報紙，說吧，不也是時常主持這種的議論麼？那所謂改革的要點倒是有，一定

三集

第一課 語妙天下

近幾年來我看您貴國人在做國經營工商業的很多，尤其是商務的發展，工業的進步，真有一日千里之勢。我們本國的人倒有點兒望塵不及，實在佩服。無奈有一箇中國話說的好的，怎麼不能多見呢？您這句話倒真問的，快兒上了不用說

第三課 領事答拜（二）

我今天到府上來是專誠回拜部長的，昨日有勞，古駕降臨，敝館實在多謝了。我給部長介紹這位是敝館新任的駐英參贊官許峰先生，路過上海時候一位同伴兒還要逗留

四集

第一課 華語速學解

鄙人這大承書院聘爲講師，與諸君舊雨新知，當切磋商，豈不是一件極榮幸極愉快的樂事麼？而且鄙人所擔任的是一年級的功課，諸生是初由貴國來到書院，鄙人也恰好來首任書院的講師，怎麼這巧巧我們兩單的湊在一塊兒

第二十課 成書徵忱

今天我們華研會在今年首次開研究大會，恰巧便輪到兄弟出席，真是喜歡的了不得。本來是從去年就老盼着快點兒兄弟的講演，這次才好這容易可盼到了。原打算把所有預備的這些不可言妙的好材料兒，抖擻精神盡量發

甲學生學生們到貴陽總司令本部見轅門外左右兩邊有衛兵持槍站崗，對着斜背紅帶的值日衛兵長說驚動驚動（見軍警道辛苦二字，只有北方長江以南各省無此名詞，有說驚動的，有說謝謝的，或說勞你慰我們是日本國旅行團，有要緊的公事，求見總司令，這是我們的名片，（南方語言帶兒字的音很少，故片字不帶兒字）請衛兵長給通報一聲。乙衛兵長哦，（接過名片）是是，那麼請到承啓處罷。（一邊說一邊領到承啓處，該衛兵長仍回原處）丙承啓處的承啓官按總司令就是舊軍副官處之外另有承啓官專司傳達收發甚麼的事情，此官在前清督撫時叫巡捕，諸位先生是從甚麼地方來，幾時到的，見我們總司令有甚麼事麼。甲我們是學生旅行團，解上海那兒動身，今天剛到，打算求總司令保護。丙有護照沒有，還是另有介紹的信呢。甲倒是帶着護照哪。丙那麼諸位是一齊都見啊，還是單有一位代表去見呢。甲是，我們這五個人，都要求見。丙那麼請到這邊接待室裏候一候，我這就上去報告。甲勞駕勞駕。丙豈敢豈敢，（報告總司令之後，同着二位副官出來，說我們總司令派何副官代表接見，這位就是何副官。甲哦，（班長向副官拉一拉手）久仰久仰。丁總司令部副官處的何



るたいへん内容の濃いものです。第29課の見総司令を例にとりました。この課は貴州省の省都貴陽の駐屯軍司令官に挨拶することがテーマです。はじめに、当直の衛兵に警動警動（お騒がせします、お邪魔します）と呼びかけます。後ろに括弧で、ふつう辛苦（すみません）と言うのだが、揚子江以南では使わない、警動、謝謝、勞你駕などと言うと注釈している。また、這是我們的名片。（これは我々の名刺です）のところでも、南方語はふつう児（アル）をつけない。だから名片児といわないと細かに注意をする。また、総司令は督軍のこととか、承啓官とは清朝の頃は巡捕といったなど、言語面での注意の他、組織、官職などについても現地の実際に応じた注釈を加えています。旅行の際、こういったことは重要で、一つ間違えば身の危険を招きかねないことにもなります。同文書院の調査旅行は、中国政府の庇護の下に行われたものであり、従って、ここで総司令に挨拶することは欠かすことのできない極めて重要な行為なのです。プリント下の地図の左下に貴陽が示してあります。この一帯は西南官話地域であり、同文書院生の記録にも比較的北京語が通じた印がつけてあります。なお、レジュメのキーワードにある「支那經濟全書」、「支那省別全誌」、「新修支那省別全誌」は、「調査大旅行報告書」、「調査旅行日誌」、「各期別旅行誌」など書院生の調査旅行の報告を基に、これらを集大成した東亜同文会の誇るべき出版物ではありますが、説明は省きます。

さて、東亜同文書院大学は敗戦とともになくなりました。華語萃編も同じく姿を消すことになるわけですが、実は戦後も愛知大学油印本として生きてまいりました。このことは学生としてこれを学び、後には教員としてこれを教えることになった私自身お話できるわけです。ただ資料はさほど多くないので、空白の部分が埋らない。ぜひ皆さんからもご教示願いたいと思います。

周知のように愛知大学は敗戦により上海から帰国した東亜同文書院大学の本間喜一学長はじめ教

職員学生が中心となり、昭和21年豊橋市に設立されました。同文書院と同じく愛大でも鈴木擇郎先生が華語萃編を使って中国語を教えられたのは当然でしたし、中国語の先生方も全員同文書院出身者でありました。入試の外国語は中国語と英語でしたし、私の入学した昭和26年当時は、同文書院からの学生も在学中でしたので、念書もしっかり行われておりました。学生寮、下宿、食堂や売店などで中国語でやり取りする学生達がさほど奇異に感じられなかった雰囲気があり、愛大では中国語が特別な位置にあったように思います。当時、「滬友」誌上で“愛大は鈴木擇郎教授が上海時代と同じようにやっていて、益々頼もしい”との投稿もありました。

愛大以外でも、神戸外大では坂本一郎先生など5名の同文書院教授が勤務されたので、華語萃編が使用された可能性があります。その他、霞山会が主催する語学学校ではどうか。また滬友会は昭和35年に華語萃編初集を印刷し（原版は不明）、会員に頒布しております。

さて、愛知大学では1年次で初集、2年次で二集と、同文書院とほぼ同様に昭和30年頃まではやってきましたが、その後は初集が1年次では終らず、2年次まで持ち上るようになります。

ここでもう一度プリントの2、3、4を見てください。愛大版では縦組みのもので現存するのは2種確認できており、昭和24年（？）頃のもの、昭和32年（？）頃のもので、発音方式は注音字母を用いているのは共通ですが、四声記号が、古い方は圈点、新しい方は横棒と異なります。巻末に生字表（初出の漢字に発音をつけた一覧表）があるのが愛大版の特徴です。学生の負担を考えての配慮なのか、別の理由があったのか不明です。内容面では前にも触れましたが、基本的には変わっておりません。

さて、新中国になりますと、中国語も大きく変わります。1957年に漢語拼音（ピンイン）方案が公布され、発音方式が変わり、ウェード式や注

音字母がなくなります。欧文の句読点とほぼ同じ標点符号を採用した横書き書式となります。1964年には簡化字が全面的に使用されました。

これらを反映したのが、次の横組みのものです。昭和34年(?)頃使用されたもので、その期間は極めて短く、結果的には愛知大学中文会話教科書ができるまでのつなぎです。特徴は全ての初出字にピンインをつけたことです。課文中に発音表示がある華語萃編はかつてなく、この版のみです。日本では、この頃から中国語教科書は漢字とピンインを併記するのが当たり前になったように思います。

内容の面では、プリントで具体例を示しましたが、発音練習用の単語は新語に変え、課文の削減(詢僕履歴など)などをおこない、時代の変化に一定程度合わせたものとなっています。私が持っております横組みのものは、改訂のため訂正の朱を入れ真っ赤となった課文もあり、殆んど華語萃編の原型をとどめぬものとなってしまい、結果的に改訂は取り止めました。

申し遅れましたが、私は昭和34年には愛大中国語スタッフの一員となりました。愛大卒の中国語教員は私が最初です。当時の中国語専任教員は鈴木先生、桑島信一先生、内山雅夫先生、張祿澤先生と私でした。我々は授業担当のほか、教科書の編集、作成、配布なども全員でやっておりました。

結局、華語萃編の改訂は不可能であり、新しい愛大の中国語教科書作成へと向かいます。こうして中文会話教科書が誕生します。ここでプリントの3、4をご覧ください。中文会話教科書は昭和37、38年頃、謄写版印刷で出ます。教科書の構成は華語萃編を踏襲しております。発音、発音練習用単語、四字熟語、基礎篇(基本散語に当る)、会話篇(四字熟語の題名)と付録から成っております。ピンインと簡体字を使用し、練習用の単語と熟語はそっくり新語に取替え、基礎篇は文法項目による語型、文型に揃え、文法面を重視したも

のになりました。会話篇は35課、各課文は張祿澤先生が書き下した原稿を全員で検討して決定しました。初次会面その他、華語萃編と同じ標題の課が3課ありますが、課文の内容は全く違います。これを2年ほど使用してわかったことは、内容量が多すぎて2年間でも完了できないことでした。他の大学でも使用できるように、1年次、2年次ともに週3日(3時限)で十分完了する位の分量に修正し、昭和39年、大安書店から出版したのが愛知大学華語研究会編中文会話教科書であります。

中文会話教科書は愛大版の華語萃編を継ぐ定番の中国語教科書として昭和49年頃まで使用されます。しかし、同一の教科書を日本人教員と中国人教員がペアになり、リレー式に2年次まで教えるという体制を維持することが決定的に困難となります。このやり方が急増する学生に適合できなくなったからです。昭和50年以降は愛大の中国語教育は良くも悪くも他大学並みになり、かろうじて法学部と経済学部の中国法政、中国経済コースと文学部の中国文学専攻において、従来のやり方が基本的には維持されてきました。平成10年発足した現代中国語学部では同文書院における中国語教育を新しい時代に合わせて復活させてみたわけで、基本的にこのやり方を再現しました。

華語萃編は東亜同文書院において大正4年から昭和20年まで約30年間使用された名教科書であります。日本人と中国人が協力して編集しなければ名教科書はできません。また、名教科書といえども、教える者と学ぶ者が一心となって使わなければ成果を挙げることはできません。華語萃編は愛知大学でも昭和21年から昭和38、39年頃まで使用しましたが、やはり東亜同文書院あつての華語萃編であります。

終わりに、二つのエピソードを紹介して、本日の話を終わらせていただきます。

一つは、敗戦後、日本に逃げ帰った上官の身代わりとなって、戦犯収容所に囚われの身となった

書院卒業生が、獄中で華語萃編と旅行用語を教科書に使って、同じく戦犯として収容されていた台湾出身の旧日本軍兵士たちに、台湾に帰ってから役に立つようにと毎日中国語を教えたという話です。この方は皆から囚人代表者に選ばれた人格者で、小岩井淨学長や滬友会などの嘆願が効を奏し、後に無罪が確定し釈放となりました。

もう一つ、これも書院卒業生で65歳を過ぎてから遼寧大学に語学研修留学をした方の話です。夏休みに旅行してマンチューリでハルビン行きの切符を購入するに当たり、駅の窓口、市中の発券センターなど市中をたらい回しされた挙句の果に、最後の切符売り場の女性職員から沒有（ない）と一言いわれて、ピシャリッと窓を閉められた。怒りで頭がいっぱいになり、「おい、あんた、名は何て言うんだ」と言うつもりで、反射的にでた言葉が「喂！ 您貴姓？ 您貴姓啊？」でした。ご本人が滬友ニュースに投稿されています。決して幻ではなかった名門校、東亜同文書院の中国語教科書『華語萃編』にふさわしい象徴的なエピソードだと思います。

今、東亜同文書院も華語萃編も存在いたしません。今後、華語萃編を教科書として使うということも無理でしょう。このような時に華語萃編をどのように取り扱うのか、単なる研究対象であるだけのものなのか、複雑な思いがあります。

以上で私の話を終わらせていただきます。ありがとうございました。

質 疑 応 答

司会 長時間にわたり、たいへん詳しくお話しいただき、ありがとうございました。ここで若干の時間をとって質疑応答をしたいと存じます。

Q 愛知大学の華語萃編の名前は知っていましたが、現物は今日はじめて拝見いたしました。初集を見ますと、53課ありますが、授業で使用情况、どのくらいでこれを教えたのかお

教え願います。

A 大学のカリキュラムも年代により変化があり、外国語科目の時間数も時期時期で変化があり、一定していないわけです。昭和26年頃は、初集は1年次で終わったと思います。1週3回（3時限）です。2年次は二集を使いました。愛大中文会話教科書は昭和40年以降使用しました。これは他大学でも使用されることを前提にした内容量で、週3回（3時限）で、1年次、2年次の2年間使用しました。

Q 華語萃編では文法については一切書かれていません。早い段階で会話文に入っていることが印象的です。その場合に文法的説明をされたのかどうか、当時、品詞分類などの文法的概念が確立されていたかどうか知りませんが、これらはどのように教授されていたのか、学生たちはどう考えていたのかをお教えてください。

A その点は話の中で触れませんでした。大事なことだと思います。この点について「滬友」、「滬友ニュース」など同窓会誌、会報上で見ると学生の意見は両極端に分かれているように見られます。一つは同文書院の中国語教育は完璧に近いものだったというもの、これが多く目につきます。もう一つはまったく文法がない。およそ大学で学ぶ外国語に非ず、ただ単に暗記するだけのものだ、我々は語学を学ぶのであって、このような中国語を学ぶのではないというものです。しかし総じていえば学生は中国語とはこういうふうに学ぶものだと思って学んでいたと思います。これは大学昇格以降の入学生だけではなく、それ以前の者の中にもあるのです。後に同文書院の教授となった卒業生の方も、滬友誌上の座談会で、学問的なことは何も教えてくれないので、このような事では中国語を教える立場に立った者が大変困るといっています。

私もこの点については前々から考えておりました。私の考えは具体例でいいますと、手元に鈴木擇郎先生の著書『中国語教本』（初版・中

級・高級)及び『中国語教本教授指導書』というものがあります。これは旧制の商業学校(小学校卒業後入学)用の中国語教科書ですが、これは基本的な文法事項を軸に編集された教科書です。戦中、中国語の需要が高まり、商業学校で中国語を教えるところが増えたことを反映したものです。他方、華語萃編は、旧制の中学卒業者を対象としたものです。ご指摘のとおり、文法的事項がまるでないものです。書院の先生方は同文書院生ともなれば、当然持っている漢文・英語の学力、漢文法・英文法の知識を自分で応用して、華語萃編を学び、中国語を習得できると考えていたようです。従って、名詞、動詞だとか、主語、賓語とか文法事項のあれこれを教授することが必要であると考えていなかったとしか思われなないのです。ここに同文書院卒業生の方が書いた小説で、一つは『朝上海に立つ』、もう一つは題名も『同文書院生』です。どちらにも書院生が中国語を学んでいることを描いています。後者は前に述べた中国語が嫌いで、中国語の授業がいやで、夏休みになって日本に帰ったらもう学校へ戻らないと考える主人公が描かれています。しかし、5,000人弱の卒業生の大多数が、多かれ少なかれ中国とかかわる分野で中国語を活用して仕事されたことを考

えますと、華語萃編による中国語教育は成果を得ていると言えるのではないのでしょうか。

先ほど紹介した「您贵姓啊?」の続きですが、この方は同じ文章の中で、同文書院では公家さん風の上品な中国老師が、まことに高尚な北京語を教えてくれた云々と書いています。よく同文書院中国語の雰囲気伝える言葉だと思えます。

司会 では最後にどなたかありますか。

Q 昭和22年私が入学したときはやはり華語萃編で、陸軍の使った用紙にガリ版刷りの1、2枚、授業の際に手渡されたプリントを使いました。授業のないときは上級生の下宿に行き華語萃編を教えてもらいました。それが念書ですね。そんなものが今でも残っておりますか。

A 私が入学した昭和26年には、製本されたものがすでにできておりました。これは豊橋プリント社で油印されたものです。昭和24年の新制大学以降は学生数も増え、中国語履修者も一定数が毎年確保されましたので、外部に発注して作ったと思います。それ以前は鈴木先生の手書きのプリントだったのでしょうか。現物は見ておりません。

司会 それでは以上をもちまして講演会を終了したいと存じます。